

研究の成果と今後に向けて

【小学校：体力を高める運動】

(1) 研究の視点1『指導内容の工夫』

【成果】

- ・2年間の指導計画を立てることにより、身に付けさせたい力を見通した計画を立てることができた。また、1年次、2年次と動きの質や児童の運動に対する考え方の高まりが見られた。
- ・自己の体力の実態を知ることで、必要感のある課題を見付けることができた。本時の振り返りと次時の課題を一体化して考えさせることで、見通しをもって活動することができていた。
- ・子ども同士が自然とかかわりをもてたり、運動の変化を子どもが見付けたりすることができる場を用意することで、自分の課題に合った運動をすることができていた。

【今後に向けて】

- ・何の根拠をもって、「自分の体力に合った」運動を選んでいるのかを考えさせていく。
- ・教師との対話、ペアとのかかわりから、自分の課題に合う運動を選ぶことができるようにする。
- ・目標、課題、まとめ、評価の一体化を図ることで児童も教師も見通しをもって学習活動に取り組むことができるようにしていく。

(2) 研究の視点2『かかわり合い』

【成果】

- ・前向きな言葉掛けを心掛けることにより、子どもがのびのびと運動に親しむことができた。子ども同士のかかわりの場面を提示することでかかわりの活性化が見られた。
- ・ペア活動をする中で、課題解決のための声掛け、成長を実感する声掛けができていた。
- ・かかわりを意図した運動、動きの変化が付けられる運動、子どもにとって魅力のある運動を用意することで、運動の楽しさや運動する喜びを感じることができていた。

【今後に向けて】

- ・対話的な学びから、子ども自身が自分の課題に気付いたり、課題を解決するための見通しをもったりするようにしていく。場と場をつなぐ交流や運動のポイントを共有できるような意図的な交流の場を設定していく。
- ・運動を選択した根拠やその高まりを見取り、児童に近す評価の工夫をしていく。何をもって高まったのかを見直し実感させていく必要性、その方法について考えていく。

【小学校：ブレルボール】

(1) 研究の視点1『指導内容の工夫』

【成果】

- ・今年度の運動が高学年などの運動につながっていくかを見通して指導計画を立てることができた。ゲームを通して、基礎的な力をしっかりと身に付けさせることができた。
- ・チームの作戦→自分のめあてという流れが子どもにとってわかりやすかった。ゲーム1とゲーム2の間の作戦タイム（成果と課題の話し合い）をとることで技能の高まりも感じられた。
- ・実態にあった場やルール、教具（ボールやネットの高さ）を用意することで、児童が運動に親しむことができ、技能の高まりを感じさせることができた。

【今後に向けて】

- ・作戦、目標、課題、めあてなどといった言葉の整理（おさえ）が必要。チームの作戦と個々のめあてのつながりを考えていく必要がある。子どもの実態に応じた課題の整理が必要。
- ・技能の高まりが見られたら、ルールをさらに工夫（制限）することで新たな課題が生まれてくるなどといった技能とルールのバランスを考えていく必要がある。

(2) 研究の視点2『かかわり合い』

【成果】

- ・次に何をすべきかななどのマネジメント、個を大切に声掛けなどにより、児童が安心して楽しく運動に取り組むことができていた。
- ・これまでの学びを生かしたかかわり方ができていて、さらに声掛けの仕方などを指導するなど、発達段階に応じたかかわり方の基礎を身に付けさせることができた。
- ・ブレルボールをアタックブレルという形に変えることでゲームの楽しさや難易度が高まり、子どもが夢中になって取り組むことができていた。

【今後に向けて】

- ・子どもの思考を整理させたり、深化させるための対話的、具体的な声掛けを意識していく。
- ・運動時間の確保のために、書く内容と話し合う内容の精査が必要。

【中学校：剣道】

(1) 研究の視点1『指導内容の工夫』

【成果】

- ・「気」「剣」「体」それぞれのポイントが、生徒にとってとらえやすい言葉で表現されており、正面打ちにおける自己の課題を理解して運動に取り組むことができていた。また、自己や仲間の技能の根拠をとらえたり、アドバイスし合ったりするなどの土台づくりに繋がっていた。
- ・正面打ちを3つの段階の練習に分けて生徒が選択できるようにしたことにより、自己の能力に応じて練習方法を選び、課題解決に迫ることができていた。

【今後に向けて】

- ・本時の学習では「改善ポイントを見つけること」「練習を工夫すること」が学習課題として挙げられていた。「技術向上のポイントを見つけること」に取り組んでいる生徒もおり、授業を通して身につけてほしいこと、考えてほしいことを焦点化する必要があった。目標や課題について、生徒の発達段階を十分に考慮して内容を精選していく必要がある。

(2) 研究の視点2『かかわり合い』

【成果】

- ・防具の着装、声出し対決、正面打ちの段階的練習など、あらゆる場面において複数の生徒がかかわり合いながら学習ができるようにすることで、生徒同士が自然に学び合いながら授業に取り組む姿勢が生まれていた。
- ・剣道の特性上、面の着装に時間がかかったり、練習中に互いの声が届き取りにくかったりすることで、運動をする時間とかかわり合う時間のバランスをとることができていた。

【今後に向けて】

- ・iPadの活用は、自己の課題をとらえる手立てとして有効である。一方、かかわり合いを生み出すための手立てとしては効果的ではない側面もある。iPadを用いたかかわり合いを促す手立ての工夫については、より深い検証が必要である。
- ・課題把握の場、課題解決の場は設定されていたものの、目標に迫るための十分なかかわり合いとなっていたかについては課題が残った。剣道の授業における具体的な声かけ例の提示、互いにアドバイスし合うための学習形態の工夫、運動量を確保しつつ生徒が深くかかわり合うための時間調整の仕方などについて、更に研究を進めていくことが大切である。

【中学校：マット運動】

(1) 研究の視点1『指導内容の工夫』

【成果】

- ・同調性というテーマと、それを構成する5つの項目をわかりやすく提示することにより、生徒が演技を見る上での視点を整理することができ、互いに見合ったり、声をかけ合ったりして動きをシンクロさせていく姿が見られるなど、積極的にかかわり合うための手立てとなっていた。
- ・タブレットを活用することにより、グループや個の演技を客観的に見たり、仲間のアドバイスと照らし合わせることで、自己の動きの改善につながるものとなっていた。広角レンズを使うことにより生徒が移動する範囲を狭くしていたことも、効率的・効果的な学習の手立てとなっていた。

【今後に向けて】

- ・思考判断の授業であることから、達成のための視点を提示することで生徒は一生懸命に自己の運動について振り返ることができていたが、指導者の説明や生徒の記述に時間がかかり、十分な運動量を確保することができていなかった。単元を通して、自己の運動についての振り返りや、よりよい動きにするための考え方、記述の仕方についてしっかりと指導し、表現する力を身につける必要がある。

(2) 研究の視点2『かかわり合い』

【成果】

- ・できる技、できそうな技などの「自己に適した技」で演技を創作していったので、技能が高くない生徒でも目的意識をもって授業に取り組むことができていた。そのことが、本時のグループ練習の場面において、意欲的に練習をしたり、アドバイスを合ったりすることに繋がっていた。また、「同調性」という課題であるからこそ、その程度を高めるために深い学び合いができていた。
- ・みんなで「揃える」「演技を見る」「よりよくするために考える」など、グループ活動中心の学習形態にすることで、自然にかかわり合う風土ができていた。

【今後に向けて】

- ・同調性について考える上で、ほとんどの生徒は「タイミング」「姿勢」の2点を意識していた。「高さ（大きさ）」「スピード」「距離」についても考えさせられるような手立てを提示することで、生徒同士のかかわり合いはより深いものになったと考えられる。教材を生かした方、運動とのかかわり方について、よりよい方法を考えていくことが必要である。
- ・個人の課題をグループで共有する、グループ同士で演技を見合っって評価をするなど、1人のものを複数のものに、1グループのものを全体のものにと、考えや思いを広げていくような工夫が必要である。

「旭川の体育」の実践

旭川支部 旭川市立六合中学校 教諭 五十嵐 敬

1. 北海道学校体育大会旭川大会を終えて

第 54 回北海道学校体育研究大会旭川大会が平成 29 年 10 月 20 日（金）に開催された。全道各地より 350 名を超える参加者を迎え、午前は小学校 2 校、中学校 2 校において公開授業が行われ、午後は大雪クリスタルホールにて開会式、全体会、分科会、記念講演、閉会式が行われた。

研究主題「自ら求め、積極的にかかわる体育活動 ～わかる・できる・のびる体育学習を目指して～」を設定して 3 年、旭川の力を結集し研究に研究を重ねて公開した授業は、多くの方々から高評価をいただくことができた。授業そのものは研究部が中心となって創り上げてきたが、連盟事務局や研究部のの方々、他支部研究部の皆様とのつながりや支えがあったからこそ大会を成功裏に終えることができた。

今後は、次期学習指導要領を見据えつつ、旭川の子どもたちが「体を動かすことは楽しい！」と心から思えるような授業を広げるべく、研究を進めていきたい。

旭川支部 研究主題

自ら求め、積極的にかかわる体育活動

～わかる・できる・のびる体育学習を目指して～

研究の視点1～指導内容の工夫	研究の視点2～かかわり合いの工夫
① 実態を踏まえた指導計画の作成	① 教師と子どものかかわり合い
② 目標の明確化、焦点化	② 子ども同士のかかわり合い
③ 場づくり、教材・教具の工夫	③ 子どもと運動とのかかわり

	公開授業（小）		公開授業（中）	
学 年	小学校第 6 学年	小学校第 3 学年	中学校第 1 学年	中学校第 3 学年
領 域	体づくり運動	ゲーム（ネット型）	武 道	器械運動
単 元	「体力を高める運動」	「プレルボール」	「 剣 道 」	「マット運動」
授業者	旭川市立陵雲小学校 梅 田 英 明	旭川市立春光小学校 辻 起 大	旭川市立啓北中学校 中 枝 直 亮	旭川市立神居中学校 高 田 勇 作

